

2019 年度実施概要

学校名

東京都立八丈高等学校

採択活動名

新たな海洋文化教育の発見と考察

取り組みの概要

これまで、八丈島と小笠原（父島及び母島）の島は、おがさわら丸の八丈島寄港便を利用して、数度にわたり学校交流を行ってきた。今年度は東京都教育委員会設定科目「人間と社会」を利用して、八丈島に流れ着く海洋漂着物の調査を行い、その内容を小笠原の場で発表した。また、島の環境について学ぶとともに海洋を利用した教育活動についての視察の機会とした。発展的な単元開発を行うとともに、生徒の意識の変容を図った。

6月21日に父島二見港に到着し、小笠原高校のウインドサーフィンの授業を見学した。父島上陸後に偶然見学させていただいたウインドサーフィンの授業の様子から、ウインドサーフィンは帆が風を受けて走るスポーツであるため、風の強い八丈島でも成り立ちそうであるが、波がない内海や湾内でないとうまくできないようであり、このことから八丈島との海洋スポーツの成り立ち違いを学んだ。

大村海岸は左右を囲まれた湾になっており、砂浜であることで安全性も確保されていた。これは八丈の地形では厳しいが、対して八丈島の海岸はすぐに深くなることから海洋文化実習で行っているダイビングに適している面があると知った。同じ島しょの高校特有の授業であるが、環境による影響を受け、違いが感じられた。

その後南島へ上陸するまでの間に兄島の海中公園へ立ち寄ったが、これは島の地形による波の穏やかな場所で、海上からも優雅に泳ぐ魚を確認できた。八丈にはこのように海中公園として指定されている地区がないこ



とに疑問を感じていた。周遊中に確認できたハートロックは、崩落した斜面の部分がハート型で鉄分が酸化したため赤色になっている観光名所。保護区域になっているため、海上からしか見ることができない。ここに限らず、父島内にも自然保護地域が多く、環境を守る工夫がみられた。

南島は一日当たりの入島人数を100人までと制限し、最大利用時間は2時間とする、入島禁止期間を設けるなどの制限があると説明を受けた。石灰岩特有の「沈水カルスト地形」を有しているとして国の天然記念物に島自体が登録されているとのこと。固有の自然を守るために靴の裏を洗い、外来種の侵入防いだうえで上陸。白い砂浜はサンゴが正体ということに驚いていた。砂浜には1000年以上前に絶滅したとされるヒロベソカタマイマイの化石があり、自然を目の当たりにした。

歓迎交流会では、同年代の高校生が堂々と南洋踊りを披露している姿に驚いていたが、小学校から学ぶ仕組みが用意されているとのことだった。若い世代の人たちが自信たっぷりに堂々と島の伝統文化を披露する姿は私にも新鮮であったし、八丈との違いだと感じた。小笠原の文化に対する熱量を痛感することとなった。ちなみに南洋踊りはフラダンスに似ているところがあり、この理由は先住民にハワイの人がいたからだそうである。



小笠原太鼓の演奏もあり、八丈との文化の共通点も多く確認できた。提供されていた島寿司も同様である。戦時中、住民は内地へ強制疎開され、本土の防衛線となっていた小笠原諸島。1968年の返還まで帰島できなかったことが、固有の文化が少ない理由である。本校生徒は歓迎会后、会ったばかりの小笠原高校の生徒に誘われ、南洋踊りの体験をしていた。おがさわら丸しか来島の手段がなく、来客が長期滞在する傾向があることからか、高校生に限らず、小笠原の方々は積極性があり、あたたかみを感じた。

6月22日、昼食後には小湊海岸近くの戦跡を案内していただいた。生徒は戦跡の作られた理由などの話を熱心に聞いていた。野瀬コーヒー農園で小笠原でのコーヒー栽培の歴史や栽培方法を学習。収穫から実際に飲むまでの行程を経験させていただき、貴重な経験となった。

戦時中、本土防衛の前線基地であった小笠原には多くの戦跡が残されている。一部ではあるが、実際に見学することで理解を深めることができた。壕の中には生々しい戦争の爪痕も残されており、私も含め、戦争を知らない世代には改めて平和について考える時間となった。地形的に困難な場所に砲台が置かれていることに疑問を感じたが、島の主要部が西側であり、そこを南からくる敵軍から守るために南東の崖のところに砲台が作られたという理由を聞いて納得することができた。

コーヒー農園では、アメリカからの返還後に野生化されて育っていたコーヒーの木について、農園の方が丁寧に説明してくれたおかげで、改めて固有の植物の多さを知ることができた。生徒も言っていたように、今の時代はインターネットでコーヒーの栽培方法も、収穫から焙煎の過程も全て検索することができるが、実際に体験すると大切であることを私も感じた。文字や写真だけではわからない苦労や思いなどが伝わるからなのかもしれない。そのことを聞いていた農園の方がとても嬉しそうだったのが印象に残っている。

夜の父島の返還祭は51周年を祝うものであった。前日に引き続き、小学生～高校生たちも数多く参加していた南洋踊りや、小笠原太鼓の演奏には生徒と一緒に見入ってしまった。伝統文化がしっかりと若い世代に引き継がれていること、若い世代の子たちが恥ずかしがることなく、むしろ誇りをもって堂々と舞台に立つ姿は八丈も見習いたい。そのためには文化に触れる機会を増やすこと、発表する場が多く設けられることが大切なかもしれない。

よく23日の9時に宿舎を出発し、小笠原国立公園の探索へ出発。標高319メートルの中央山を登ると父島の風景を一望しビジターセンター、世界遺産センター、海洋センター、水産センターを見学。展示物を熱心に読んだり、ガイドの方に質問をしたりするなどして各人が理解を深めていた。

午前中の散策では準絶滅危惧種に指定されているオガサワラトカゲを見つけることができた。すぐ近くでは外来種のグリーンアノールと呼ばれるトカゲも確認でき、外来種に環境を脅かされる固有種といった構図を確認できた。生徒曰く、この状況は八丈にも共通しているという。話を聞くと、グリーンアノールは捕獲すると1匹100円で買い取ってくれるようで、島全体で駆除意識が浸透していることが分かったし、画期的なアイデアであると感じた。



ウミガメについての展示も充実しており、生徒同士で八丈との比較をし、考察していた。八丈では近年カメの産卵がないが、個体数は増えているとのことである。気候の違いや、砂浜の有無で産卵の差はわかるが、個体数にはどのような背景があるのか調べていきたいと結論を出していた。ウミガメに関しては、幸運にも夜に砂浜へ上がってくる姿を見ることができた。産卵の様子まで見ることはできなかったが、市街地からすぐのところであったので生徒ともに驚いたのが記憶

に残っている。この海岸には光が入り込まないような工夫（孵化した赤ちゃんが光に向かって市街地へ行ってしまおうのを防ぐため）や、市街地に侵入しないようなネットが置かれるなどの工夫が見られた。



小笠原での最終日。1～3限は時間をいただいて、八丈島で行った海洋漂着物の調査に関する報告を行った。中国語で書かれたペットボトルやプラスチック製品のことについて話すと、小笠原高校の生徒もそのような長い距離を移動してプラスチック製品が海洋を漂い、流れ着くことに驚きを感じてくれた。



発表終了後は離島準備を行い、二見港待合所へ。小笠原高校の生徒、先生方とのお別れをし、15時には乗船。出港の際には太鼓や旗などが数多くあり、大々的なセレモニーであった。

曜日の関係もあり、小笠原高校での交流はこの日のみとなってしまった。休日にも関わらず、この日までも多くの生徒、先生が交流をしてくれたことには感謝の気持ちしかない。そのおかげもあり、スムーズに交流を進めることができた。

交流会では小笠原高校は初めの発表者として、交流会をスムーズにするレクリエーションを考えてくれており、良い雰囲気自分たちの発表を行うことができたが、スライドの精選が足らずに、時間が押してしまったのが今後の課題といえる。よくまとめてあった発表であっただけに、この発表に関して意見を求めたり、それについて話し合ったりする時間が取れず、八丈について一方的に伝えるだけになってしまったのが残念であった。



離島の際には八丈にはないお見送りの方法で、生徒が「八丈でもやればいいのに」と言っていたのが印象に残っている。毎日来る船と、一週間に一度の船の差なのだろうか。それとも、島としてのもてなしの気持ちの差なのだろうか…。たくさんの船が出港後もしばらく併走する様子や、多くの人が民宿などの旗をふって見送ってくれる様子は壮観であった。最後には船からダイブして海上から手を振る様子は噂では聞いていたが、とても思い出に残る光景であった。



活動中の写真

デジタルデータにて2～3枚の添付をお願いします。

実施単元名 ※実施した単元の数に応じて記載してください

1. 地域社会を築く

2.